

人は、忘れる生き物である。忘れたくない覚えていたいことを忘れてしまう。ときに落ち込み、がっかりする。だが、本当に忘れなくなってしまうらどうなるだろう。きっと生きてはいけない。悲しいことや辛いことをずっと忘れずにいたらどうなるだろう。どんなに辛いことや悲しいことがあったとしても、人は少しずつ忘れていくものである。忘れていくというよりは、薄らいでいくといった方があっているかもしれない。

先日、中途半端に時間があつたため、本屋さんに入った。本屋さんは、こういうときも便利である。こういうときに限って、ふいに出合いがある。オレンジ色、それも蛍光オレンジの表紙が目飛び込んできた。タイトルには、『大人の流儀 12 またどこかで』とあつた。本の帯には、「ベストセラーシリーズ最終巻」とある。著者は、伊集院静さんである。「数え切れない出逢いと別れを経験してきた作家が死の直前まで書き綴ったラストメッセージ」「伊集院静があなたに贈る最後の言葉」と本の帯にある。

伊集院静さんがこの世を去って、もう1年と一月が過ぎた。また伊集院静さんの本が読めるのかと思うと、何の迷いもなく、積み上がった新書の山から一冊を手に取り、レジへと向かった。すぐに読み始めた。久しぶりの感覚だった。ちょっと懐かしく感じる伊集院静さんの文章である。

私は、伊集院静さんの文章に憧れを抱いている。影響を受けているといった方がよいかもしれない。とはいっても、そう簡単に同じような文章が書けるわけではない。月に一度のペースで、福島民友新聞社の「随想」欄にエッセーを掲載させていただいている。このコーナーで綴る文章のイメージが、伊集院静さんのエッセーである。ところが、実際には、なかなかうまくいかない。

4月から12月まで、7回にわたり書いてきたが、実は、書きたいことが書けてはいない。そのときそのときのベストを目指して取り組んでいるが、むずかしい。自分としては、何かを待っている感覚である。その何かとは、例えば、前述の悲しみや辛さを忘れることだったりする。もう少しで書けそうな気がするのだが、どうもたどり着けない。まだまだ足りないものがある。もちろん、伊集院静さんの人生と比べたら、私の人生は、平凡そのものであろう。だが、平凡そうに見える人生にも、山があれば谷もある。数えきれないほどの出会いもある。出会いには、ドラマがある。そのドラマを書きたい。これは、来年の宿題となる。

今年は、今までと比べると、悲しいことや辛いことが少なかった。それはそれでいいのかもしれない。穏やかな1年だったのかもしれない。だが、その分、ドラマがなかったように思う。その点が気になる。果たして、このままでいいのだろうか。

伊集院静さんのラストメッセージである『またどこかで』は、あっという間に読み終わる。そして、いつものように読後感が残る。来年も懲りずに、何かを待ちながら書き続けようと思う。